

『婦人画報』 100年

編集者鷹見久太郎の仕事

今年、『婦人画報』が創刊100周年を迎えました。1905年に国木田独歩によって創刊されたこの雑誌は、数多くの婦人雑誌のなかでも最も長い歴史を誇り、女性のためのハイグレードな雑誌として、今なお厚く支持されています。

さて、この『婦人画報』、鷹見泉石の曾孫である久太郎（1875～1945）が、1931年まで編集に携わっていたことをご存じでしょうか。

1906年、東京専門学校（現早稲田大学）同窓の窪田空穂の紹介で独歩主宰の近事画報社に入社し、編集の仕事始めた久太郎は、翌年経営難に陥った同社を引き継いで東京社を発足、『婦人画報』の発行をつづけていきます。

ところで、この時代は、女性を取り巻く環境の大きな変革期といわれます。日露戦争後、女子教育への期待が高まりをみせ、その普通教育就学率が男子とほぼ並ぶようになりました。1911年には、平塚らいてつの主唱による文芸雑誌『青鞜』が創刊。大正デモクラシーの波に乗って女性解放運動の拠点となり、終刊



鷹見久太郎編集の『婦人画報』

を迎える1916年には、新しい女性^{せいせい}が社会に進出、職業婦人という言葉も生まれています。

こうした社会情勢を背景に、『画報』形式の先駆的な雑誌『婦人画報』は、写真や絵をふんだんに使用した視覚に訴える誌面を特徴として、社会で活躍する女性、皇族・華族など上流婦人、家庭事情、流行、美容、教育などの幅広い分野を紹介していきました。記事の執筆陣の一例を挙げる

と、学者には新渡戸稲造・倉橋惣三、古河ゆかりの藤懸静也や安井哲子。小説家では幸田露伴・泉鏡花・菊池寛。画家においては錦木清方・伊東深水。歌人では与謝野晶子・佐々木信綱など。いずれも各界の第一人者であり、女性文化の向上を真摯に目指していた久太郎の編集理念を窺うことができます。

今回の企画展では、広く一般女性の生き方に夢を与え、意識変革のための啓蒙・教育また実用の書として多岐にわたる役割を果たしていた『婦人画報』と、編集者鷹見久太郎を紹介します。（同展は6/26まで）